
白の階段と破片

ロースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の階段と破片

【Nコード】

N1761M

【作者名】

ロースト

【あらすじ】

天使製造計画！嘘ですごめんなさい。

予想：実験サンプルたちの成れの果てです。

白の階段と破片

カッン カッン

もうどのくらいだろう
かしら

僕は階段を上っている
ているの

白くて白くて
て

まわりは白ばかり。
かり。

他の色なんて何もない。
もない。

在るのは階段と僕

カッン カッン

甲高い音が鳴る。

ゆっくり、ゆっくり上って
くり上ってくの

何のために。

もう忘れた。

いや、元々ないのかも。
いのかも。

どのくらいだろう

僕は階段を上っている。

カッン カッン

もうどのくらい

私は階段を上

白くて白く

まわりは白ばっ

他の色なんて何

在るのは階段と私

カッン カッン

甲高い音が鳴る。

ゆっくり、ゆっ

何のために。

もう忘れたわ。

いいえ、元々な

どのくらいかしら

私は階段を上

ているの。

何分、何時間、何日？

何日？

それ以上かもしれない。

れないわ。

時間間隔がない。

時が経っているようで、

ようで、

経っていないようにも感じる。

うにも感じる。

ついでに飢えも疲労もない。

疲労もない。

何分、何時間、

それ以上かもし

時間間隔がない。

時が経っている

経っていないよ

ついでに飢えも

階段は白、壁は白

でも、本当に壁なんてあるのかな。

なんてあるのかしら。

在るのかないのかわからない。

かわからないわ。

階段は白、壁は白

でも、本当に壁

在るのかないの

カッン カッン

本当に在るのかな。

ら。

僕は本当に在るのかな
るのかしら

カッン カッン

本当に在るのかし

私は本当に在

カッン カッン

見えるのは白

階段も白、壁も白、そして僕も

カッン カッン

見えるのは白

階段も白、壁

も白、そして私も

どのくらいだろう
どのくらいの時間が経ったのだろう。
が経ったのかしら。
僕はいつからこうしていたんだろう。
していたのかしら。

カッン カッン
どのくらいだろう
気付いたときにはもう上っていた。
もう上っていたの。
何をするでもなく、
こうやってずっと、

どのくらいかしら
どのくらいの時間
私はいつからこう

カッン カッン
どのくらいかしら
気付いたときには
何をするでもなく、
こうやってずっと、

ずっと
階段を上っていた。
たの。

ずっと
階段を上ってい

先には何があるのだろう。
かしら。
なぜ僕は上るのだろう。
かしら。

先には何があるの
なぜ私は上るの

僕を突き動かすのは何だろう。
は何かしら。
この先には何があるのだろう。
るのかしら。

私を突き動かすの
この先には何があ

カッン カッン

カッン カッン

いつまでこんなことを続けるのか

いつまでこんなこ

一生ここから出られないのか
れないの

一生ここから出ら

でも何故か、本心で、強く、
で、強く

でも何故か、本心

心の底から、ここを出たいと、
を出たいと、

心の底から、ここ

思えない

思えない。

ひととき眩しい白が

ひととき眩しい白が
階段の先に現れる

階段の先に現れる

でも、僕は焦らない

でも、私は焦らない

ゆっくりゆっくり歩く

ゆ

っくりゆっくり歩く

ゆっくり過ぎるぐらいに

ゆっくり過ぎるぐらいに

ゆっくりゆっくり歩く

ゆっくりゆっくり歩く

心は好奇心と不安でいっぱいだ。

心は好奇心と不安でいっぱいだ。

心は焦るが歩みはゆっくり。

心は焦るが歩みはゆっくり。

階段を上りきったところには

階段を上りきったところには

中途半端に開いた扉

中途半端に開いた扉

眩い光が差し込んで

眩い光が差し込んで

眼が眩むのと緊張が最高点に着てるのと

眼が眩むのと緊張が最高点に着てるのと

心臓がドキドキバクバク

心臓がドキドキバクバク

高鳴りはひどくなる一方

高鳴りはひどくなる一方

手を伸ばす。ゆっくりゆっくり。

手を伸ばす。ゆっくりゆっくり。

どくどくと血が流れてるのがわかる

どくどくと血が流れてるのがわかる

それでいて、第三者のように考える自分

それでいて、第三者のように考える自分

知ってる。この先にあるのを知ってる。

知ってる。この先にあるのを知ってる。

ああ、この後にあるのは

ああ、この後にあるのは

扉を開いた先にあつたのは

扉を開いた先にあつたのは

光と鏡。そして自分の姿。

光と鏡。そして自分の姿。

でも、鏡に映る僕は僕じゃない。

でも、鏡に映る私は私じゃない。

ガラス張りの部屋を中心

鏡に手を伸ばす

ガラス張りの部屋を中心

鏡に手を伸ばす

触れたその鏡は、不思議な感覚で

触れたその鏡は、不思議な感覚で

自分の現在の姿を見る

自分の現

在の姿を見る

自分の目で確かめる

自分の

目で確かめる

なんだ、僕死ぬのか。

なんだ私死ぬ

んだ。

僕の左半身は何処にもない

私の右半身は何

処にもない

此処にあがって来るまで

此処にあがって来るまで

生きてられたのが不思議。

生きてられたの

が不思議。

だって、左は全部ないんだ。

だって、右は全

部ないのよ。

どうやって歩いてきたんだっけ。

どうやって歩い

てきたのかしら。

鏡に映った姿は僕じゃない。

鏡に映

った姿は私じゃない。

この鏡の向こう側にいる彼女の向こう側にいる彼方

彼女は右半分がない。

方は左半分がない。

だって、僕と彼女是一緒だから。方は一緒だから。

僕と彼女で一つの作品。でひとつの作品。

自分ひとりでは失敗作

りでは失敗作

それに気付いたからやっぱりからやっぱり

僕らは失敗作。がらくた。がらくた。

もうちょっとで完成だったのにな。

完成だったのにな。

もうちょっとで。

もうちょっとで一つになれたのに。

一つになれたのに。

また失敗か。後どのくらいあるんだろうどのくらいあるんだろう

あとどのくらいで彼女に届くのだろうかで彼方に届くのだろうか

この鏡

彼

だって、私と彼

私と彼方

自分ひと

それに気付いた

私たちは失敗作。

もうちょっとで

もうちょっとで

もうちょっとで

また失敗か。後

あとどのくらい

ああ、一つになりたい。
りたい。

ああ、一つにな

彼女と、一つになりたい。
なりたい。

彼方と、一つに

いつになったら、完全になれる？
完全になれる？

いつになったら、

僕たちは二人で一つ。

私たちは二人で

一つ。

それぞれが、自分の意思で

それぞれが、自

分の意思で

一つに、完全になることを

一つに、完全に

なることを

心から望んでいる。

心から望んでい

る。

また失敗か。もう次は無いぞ。コレで終わりだ。

この実験も、コレで潰えたのね。ようやく肩の荷が下りたわ。
そもそも、こんなイカレタ実験、もうとつくに、意味の無い
もののなに。だって、製作者はすでに……

そんな声が、どこかで聞こえた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1761m/>

白の階段と破片

2010年10月11日08時42分発行